

令和7年度子供・若者育成支援強調月間
第41回 東伊豆町青少年主張発表大会

発表文集

日 時 令和7年11月15日(土)

9時30分～12時00分

会 場 東伊豆町役場1階 大会議室

発表者 町内小中学生の代表、町内在住の高校生



主催 東伊豆町

東伊豆町教育委員会

東伊豆町青少年健全育成会

後援 東伊豆町PTA連絡協議会

東伊豆町青少年問題協議会

協力 稲取高等学校ボランティア部

静岡県青少年対策本部長／静岡県青少年育成会議会長
静岡県知事 鈴木 康友

本日、東伊豆町において、令和7年度子供・若者育成支援推進強調月間第41回東伊豆町青少年主張発表大会が開催されますことを心からお慶び申し上げます。また、日頃から、子供・若者の健全育成や支援活動に積極的に取り組まれている皆様の御尽力に対し、改めて感謝申し上げます。

近年、少子高齢化やデジタル化の進展により、地域のコミュニティやつながりは従来の姿から大きく変化し、直接顔を合わせる機会に代わって、オンライン上での交流の場が増えてきています。また、働き方の多様化や多文化共生の進展などによって、若者を取り巻く社会状況は複雑さを増しています。

時代の変化を踏まえ、ニートやひきこもり、不登校、貧困、児童虐待など子供や若者に関わる課題への支援のあり方は家庭・学校・地域・職場が一層連携を強めていくとともに、新しい形を模索する時代に入っています。

こうした状況を受け、幸福度日本一を目指す本県では、「すべてのこども・若者の“こえ”をまんやかに、誰もが自分らしく幸せに生きることができる社会の実現」を基本理念とする「しずおかこども幸せプラン」を令和7年3月に策定し、計画を推進しています。このプランのもと、子供や若者の声を施策に反映し、ライフステージを通じた切れ目のない支援と、安心して成長できる地域づくりを進め、すべての子供・若者が安心して成長・活躍できる社会の実現を目指しています。

社会の姿が変わっても、子供・若者が未来の希望であることは、いつの時代も変わりません。今こそ、青少年育成会議で掲げる共通テーマでもある「地域の子供は、地域の大人が育てる」という原点に立ち返り、県や市町のみならず、地域住民や各種団体が連携・協力し合い、一体となって取り組むことが重要です。

県民一人ひとりが子供・若者をかけがえのない存在として尊重し、様々な形でその声に耳を傾けることが、その第一歩となります。子供・若者が誇りと自覚を持ち、自分らしく幸せに生きられる社会の実現に向け、育成支援活動に携わる皆様をはじめ、県民の皆様の御協力を心よりお願い申し上げます。

結びに、本大会を契機に、総力を挙げての子供・若者育成支援活動が、県内各地で一層活発に展開されますことを祈念し、メッセージいたします。

第 41 回 東伊豆町青少年主張発表大会 目次

1. 開会のことば 東伊豆町教育委員 黒田 清隆

2. あいさつ 東伊豆町長 岩井 茂樹

3. 発表

【小学生の部】

みんなが幸せと思える社会を	熱川小学校 6 年	よこやま な な か 横山 菜々花 (P.1)
東伊豆町の観光を元気にするために	稲取小学校 6 年	せ と お あかり 瀬戸尾 朱里 (P.2)

【中学生の部】

表現の自由	熱川中学校 3 年	すずき そうたろう 鈴木 壮太郎 (P.4)
みんなに知ってほしいこと	稲取中学校 3 年	わたなべ すみれ 渡邊 堇 (P.5)

【高校生の部】

将来の夢	稲取高等学校 1 年	たかはし る か 高橋 瑠華 (P.6)
地域の医療と私の夢	下田高等学校 1 年	たかはし り の 高橋 莉乃 (P.8)
心安らぐふるさと	伊豆伊東高等学校 2 年	つちや ひ な 土屋 日南 (P.9)

☆歴代発表者 (P.11～P.19)

4. 講評 東伊豆町教育長 横山 尋司

5. 賞状及び記念品授与 東伊豆町長 岩井 茂樹

6. 閉会のことば 東伊豆町青少年健全育成会
稲取地区連絡協議会 会長 瀧口 晴男

みんなが幸せと思える社会を 熱川小学校 6年 横山 菜々花

みなさんは今、幸せですか？

私は、幸せだと感じる場面がたくさんあります。私は先生から日本人の幸福度が世界の中でもかなり低いと聞いて驚きました。アメリカのハーバード大学が研究した論文の内容では、データをとった国の中で、日本は最下位だったことが分かっています。なぜこんなにも日本人が幸せを感じられないのか、私はとても不思議に感じました。そこで、私は今の日本の社会に問題があるのでないかと考え、改めて日本の社会を見てみることにしました。

六年生の学習では、ニュースを様々な角度から見ることや政治の仕組みなどについて学んできました。だから、はじめにネットニュースをたくさん見てみることにしました。すると、「やみバイト」という言葉や「殺人事件」という言葉がたくさん出てきました。今まで自分は、あまりニュースに興味をもっていなかったのですが、日本ではこんなにも毎日事件が起こっていたのだと驚きました。さらに、ニュースの内容を読んでいくと、「仲の良かった友人を傷つけた」という話「やみバイトとは知らずに応募した」という話など、事件の内容や理由がとても似ているということに気がつきました。

次に目についたニュースは、「選挙の投票率の低下」についてです。社会科の授業で、「選挙は国民の義務である」、「行かなくてはならないもの」と習っていたので、「投票率が低下って、どういうこと？」とはじめに思いました。気になったので、選挙に行かない人の考えについても、見てみることにしました。そこでは、「選挙に行くのが面倒くさい」、「候補者のことをよく知らないから」という理由がほとんどでした。

一方で、政治が上手いかなかったり、選挙で選ばれた議員が眠っていたりすると、日本では一面の記事になることが多々あります。政治に対して国民の不満が高まると、自分たちは「大

切にされていない。」「何もしてくれない。」と考え、幸せを感じられないという人が増えていくのだろーと思いました。

こうして、日本のニュースをたくさん見たり考えたりしていくと、心がもやもやしていききました。そのもやもやについて、考えていると、

「私の住む社会って、本当は不幸なのかもしれない。」と思うようになりました。今まで自分が感じてきた幸せは、自分だけの幸せであって、社会全体を見渡すと、こんなにも不幸の種がたくさん転がっていることに、私は気が付いていなかったかもしれません。

私は、この社会の一人一人が「幸せだ」と思えるようにしていくべきだと思います。そのために、一人一人が意識を変えていかなければならないと思います。

例えば、殺人事件ややみバイトで犯罪をおかしてしまった人に対して、更生を社会全体で後押しすることが考えられます。犯罪をおかした人は、もちろん悪いけれど、罪をつぐなって社会に出たときに差別を受けたり社会から切り離されたりすることで、より孤独を感じ再び犯罪に走ることが多いと聞いたことがあります。それには、保護司と呼ばれる人たちの活動を強化していく必要があると思います。そして、社会全体を変えるためには、政治の力も必要でしょう。ですから、私たちは政治をもっと知る努力をしなければなりません。そして、選挙で投票して国民の義務をしっかりと果たしていくべきだと思います。小さなことかもしれませんが、そのような積み重ねがみんなの幸せに繋がっていくのだと思います。

それから、みんなが幸せを感じるために一番大切だと思うことがあります。それは、「身近にある、小さな幸せを幸せだ。」と、感じられるようにすることです。私は、幸せだと感じるものがたくさんあります。いっぱい眠れたとき、お菓子を食べているとき、だれかと話をしているとき、一人でのんびり過ごす時間があるとき、

ドラマや映画を見ているとき、私が見ている世界は、幸せであふれています。もちろんときには悲しかったり、辛かったりすることもあります。それ以上に身の回りにはたくさんの幸せが転がっていると思いませんか？

今は SNS が発達して、誰とでも簡単につながるができるようになりました。しかし、その分周囲の人の影響を受けやすかったり、他人と比較して自分を低く見てしまったりすることが多くなっているように思います。「自分には何かがない」、「だれも何もしてくれない」など自分の思い込みを見直して、今ある幸せに目を向け、

「私は幸せだよ。」

と一人一人が言える社会にしていけたらいいなと思います。みんながそれを感じられれば、幸せがあふれる素敵な社会をつくっていくことができると思います。

私は日常で感じている幸せな気持ちをしっかり心に残し、笑顔で友達と接することや相手の気持ちに共感することで「幸せ」を広げたいと思います。



東伊豆町の観光を元気にするために 稲取小学校 6年 瀬戸尾 朱里

私の住んでいる東伊豆町は、海や山に囲まれたとてもすてきな町です。自然豊かできれいな海や空気、山があり、小さなころからこの自然の中で育ってきた私は、この町の自然が大好きです。

私は、親戚の旅館に行くと、稲取産のキンメ料理や新鮮なお刺身を食べさせてもらうことがあります。食べることが大好きな私は、いつもお腹がいっぱいになるまでいただきます。この地元の食材を使ったおいしい料理は、私にとって何よりの楽しみであり、東伊豆町のじまんです。でも、その旅館の方が、

「むかしに比べ、観光に来る人が少なくなってしまった。」と言っていたのを聞いて、少し不安になりました。たしかに、町を歩くと、昔はにぎやかだったはずのホテルや旅館が、今はお客さんが入っていなかったり、古いままになっていたりするのを見かけます。とても残念だと思います。

学校の総合学習では、『東伊豆町の観光業について考える』をテーマに調べ学習を進めています。観光業について調べていく中で、わたしは、「どうして人が減っているのか、どうすればもっと観光に来てくれるのか」を考えるようになりました。そこで、稲取で鮮魚店に勤めている父に聞いてみました。私の父は、稲取、河津、伊東などのホテルや飲食店に魚介類を卸す仕事をしています。父によると、一九九〇年代から観光客は減り続けていて、今はその半分以上にまで減ってきているそうです。ホテルの数も昔に比べると減ってきていて、お父さんが把握している数だけでもやめてしまったホテルが十件あるそうです。

そこで、観光が低迷している理由を聞いたり自分で調べたりしてみました。

一つ目に、ホテル・旅館の老朽化があります。

昭和期に流行した団体旅行ブームで建てられた大型のホテルが、今の時代のニーズに合わなくなっています。また、後継者不足により、ホテルや旅館を続けられず、廃業していくことも多いです。確かに、町を歩いてみると、廃墟になった旅館やホテルを多く見かけます。朝日テレビの朝の番組「羽鳥慎一のモーニングショー」での内容によると、東伊豆町稲取には、十年ほど前に廃墟になったホテルが四つありました。そして、そのホテルは海の近くということもあり、塗装は剥がれ建物は荒れ果てていました。そのホテルの所有者はわかっていますが、解体に向けての話は進んでいないということでした。その理由は、解体費用が高額、解体作業が困難な地形など様々です。

他にも、十年前に休業後、所有者が複数入れ替わったことで町も所有者が特定できないホテルもあります。様々な理由で廃墟と化した旅館やホテルがあると、そこには新しい建物が建てられないので町の発展の妨げになります。また、落書きや侵入が起きることで、東伊豆町の治安が悪くなり、余計に人が来なくなるおそれもあります。落書きは法律違反になることもあるので、街灯や防犯カメラを設置して取り締まることも大切です。

二つ目に、東伊豆町よりも知名度の高い熱海や伊東、下田などへ人が行ってしまうことがあります。

そして、若い世代に魅力のある環境の整備が不足していることも観光客の減少につながっていると思います。

そこで、「どうしてもっと東伊豆に人が来てくれるだろうか」を私なりに考えてみました。

まず、町ぐるみで海や豊かな自然をアピールできるようなイベントを増やしていくとよいと思います。今、熱川地区と稲取地区は、それぞれ別々にイベントをしていることが多いので、町全体で同じイベントを行い、町以外の飲食店などにも出店してもらうなど、出店の数を多く

したり、有名な飲食店を招待したりすれば多くの観光客に来てもらえるのではないかと思います。

次に、地元の食べ物をもっと町全体でアピールしていくこともよいと思います。私の大好きな東伊豆町の特産物を、観光に来た人が「また食べたい。」と言ってもらえるようにしたいし、食べ歩きが町全体でできたら、若い観光客もたくさん来てくれると思います。さらに、今住んでいる場所に帰って誰かに紹介したら、特典をもらえるというような紹介制などの工夫ができたら、宣伝効果が出て、よさが口コミで広まるのではないかと思います。

そして、私たち子どもにもできることがあります。ポイ捨てなどをしないことで、町をきれいにしたり、観光に来た人に元気よくあいさつをしたりするだけでも

(また来たい、この町は元気だな。)

と思ってもらえるのではないのでしょうか。

このように、この町に住んでいる一人として、自分なりに町が元気になるような対策を考えました。これからもこの大好きな町のよいところを、私なりに考えていき、SNSなども使って町全体で発信していけたら、この町の状態が少しでもよくなり、東伊豆町全体がもっと元気になっていくと思います。



表現の自由

熱川中学校 3 年 鈴木 壮太郎

僕は小学校に入学するくらいのときに、スケートボードに出会いました。最初は三千円くらいの安いスケートボードを買ってもらいました。はじめてボードの上に立った時、バランスをとる楽しさに夢中になりました。しかし、東伊豆町にはスケートパークがありません。一番近いスケートパークは大仁にあるので、行けるときは大仁まで行っていますが、行けないときは、毎日のように家の近くの公園や広場で練習しています。そんな中でスケートボードに対する偏見にも出会いました。しかし僕は、スケートボードは単なる遊びではなく、自分の気持ちを表現する特別な手段だと思っています。アメリカではスケートボードはカルチャーとして認められ、子供から大人まで自由に楽しんでいます。街中にはスケートパークが整備され、スケートボードを使ったパフォーマンス大会なども盛んです。たくさんの人が自分のスタイルを表現し、仲間と励まし合う文化があります。さらに、スケートボードは東京オリンピックから正式種目になり、世界中の人々が技を競い合い、観る人に感動や驚きを与えています。14歳の吉沢恋選手が金メダルを獲得し、日本でも大きな話題になりました。これは、スケートボードが単なる趣味や遊びではなく、国際的に評価されるスポーツであることを示しています。僕は、日本でももっとスケートパークや練習環境を整え、みんなが自由に挑戦できる社会になるのではないかと思います。

しかし、日本でスケートボードを楽しむのは文化的に簡単ではありません。街中や公園ではスケートボードが禁止になっている場所がほとんどです。そのため、何度も注意されたこともあります。デッキをもっているだけで注意されたこともあります。その度に悲しくなります。せっかく楽しんでいるのに、自由にできないもどかしさを感じます。

また、日本にはスケートボード専用のスケー

トパークが増えてはいますが、数が少なく安心して練習できる場所が少ないことも問題だと思います。そのため路上や公園で練習することになり、周りの人に迷惑をかけてしまうのではないかと気をつけながらやらなければならない、自由に楽しむことが難しいと感じました。

この、日本とアメリカの文化の違いや、オリンピックでもスケートボードが認められたことを知ったとき、僕は「やりたいことをちゃんと楽しめる場所の大切さ」や「みんなのことを考えながら楽しむことの大切さ」を感じました。僕は、スケートボードを楽しむことを通して、人それぞれの個性や挑戦を認め合うことが、よりよい社会をつくることにつながると思います。

私はスケートボードを通して、技を成功させる喜びや仲間と励ましあう楽しさを感じています。それだけでなく、自由に表現できる文化の中で、人権や自由の大切さを学んでいるように感じます。ただ、スケートボードは「危ない」「迷惑」といったマイナスのイメージを持たれることも事実です。だからこそ、マナーを守り、安全に楽しむ姿を見せることが大切だと思います。また、地域や行政と協力して練習できる場所をつくったり、イベントを開いたりすることで、スケートボードの魅力を広く伝えていきたいと思っています。

僕はこれからもスケートボードを続けながら、自由に楽しむ権利を大切にしていきたいと思っています。

そして、自分の行動が周りに迷惑をかけないように気を付けながら、仲間や地域の人たちとも協力していきたいと思っています。スケートボードを通して学んだことは、ただのスポーツの楽しさだけでなく、人権や自由の大切さです。僕はこれからも、自分らしく生きることや、ほかの人の権利を尊重することを忘れずに成長していきたいです。そして大人になっても、スケートボードが教えてくれた楽しさと人を思いやること、自由の大切さを忘れずに楽しんでいきたいです。

新しい文化を認めてもらうには、ただ自分たちが楽しむだけでなく、社会とつながり、お互いを尊重しながら、理解を広げていくことが必要だと感じています。



みんなに知ってほしいこと 稲取中学校3年 渡邊 董

毎日楽しく学校生活を送っている私は、平和な日本から視野を広げて学んだ社会の授業で衝撃を受けました。世界各国で数多くの課題に直面していることを感じたからです。男女差別や貧困、戦争、異常気象、感染症……。これらの問題を解決するための一つの方策として、SDGsというものがあります。SDGsとは、「Sustainable Development Goals」の略で、日本語では、「持続可能な開発目標」といいます。具体的に十七の目標が掲げられていて、その中には、「みんな」や「すべての人」という言葉がたくさん出てきます。先進国・途上国を問わず、世界中の全ての人を対象としていることがわかります。私たちには当たり前のことが他の国ではそうではなく、安全な飲み水がなかったり、健康診断を受けることができなかったりという現状があることが信じられません。誰もが幸せに生活するた

めに必要なことは何でしょうか。

SDGsにある十七の目標達成に近づくために、中学生の私でもできることは何だろうと考えてみました。真っ先に頭に浮かんできたのは募金ですが、お金で解決できることばかりではありません。全ての目標に共通するのは、「思いやりの心」だと私は考えます。最近、思いやりの大切さについて改めて気づいた出来事がありました。それは、家族で出かけた時のことです。たくさんの荷物を持ったおばあさんに

「持ちましょうか」

と声をかけた男の人がいました。アニメやドラマなどでしか見ないようなその光景を目の当たりにして、私は心を奪われました。その男性の心からの優しさがオーラとして出ているようで、今でもその場面を鮮明に覚えています。これが本当の思いやりなのだと実感し、私もこの男の人のような行動力を身につけたいと思いました。一人一人のちょっとした思いやりが連鎖して小さな幸せとなり、やがて見知らぬ誰かを支えられるような幸せになっていくと考えました。

SDGsの十七の目標の中で、私が特に気になるのは、5「ジェンダー平等を実現しよう」です。例えば、こんな言葉を聞いたことはありませんか。

「女だから……」

「男のくせに……」

日本では、昔に比べて聞く回数は減ってきたようですが、南アジアや中東などでは、今でも問題となっています。

「女の子だから、学校には行けない」

「女の子は家で家事をしろ」

そんな言葉がまだ言われていることに、心苦しさとショックを受けました。私は、本気でその子たちを救いたいと思いました。しかし、遠い国の中学生の私が今すぐ助けることはできま

せん。それなら私は、まずは自分の国をよりよくするにはどうしたらよいかを真剣に考えることから始めてみようと思いました。

日本は、男女平等、ジェンダーレスについて、年々改善されてきていると思います。男女平等について、昔は男の人の方が圧倒的に偉いとされていましたが、今は性別に関係なく平等に仕事をする機会が与えられていたり、家事を分担したりと変化しています。ジェンダーレスについても、私が小学校低学年の頃は、ジェンダーレスという言葉を目にしたこともなく、性別記入欄も男と女の二択が当たり前でした。最近、その二つに加え、その他や無回答という項目が出てきたり、性別選択の欄がなくなったりしています。中学校や高校の制服も、性別にとらわれず自由に着たい制服を選べる「ジェンダーレス制服」を採用している学校が増えています。日本は確実に成長しています。変わっていないと思っていた今の日本が変わっている、変わろうとしていることを感じます。

SDGsの目標は十七個あります。十七個「も」あります。それだけまだたくさんの課題があるということです。誰にとっても生きやすい社会をつくるために、SDGs達成のために自分はどんなことができるだろうと考えること、それを実際に行動にうつすことが大切です。その基盤となる思いやりの心と、人々が手を取り合って協力することで新たな道が拓けることを、私はみんなに知ってほしいです。



将来の夢

稲取高等学校 1年 高橋 瑠華

私の将来の夢は、キャビンアテンダントになることです。

私がキャビンアテンダントになりたいと考える理由は、人と接する仕事を通して人の役に立ちたいという強い思いがあるからです。また、英語を使う機会が多く、海外からのお客さまとも関わることができる点に大きな魅力を感じています。私は人と関わることや誰かの役に立つことが好きです。そのため、キャビンアテンダントという職業は、自分の特性を生かしながら挑戦できる仕事だと思います。

私が将来なりたいキャビンアテンダントの姿があります。それは、明るく笑顔を絶やさず、責任感を持ってお客さまに接することができる人です。飛行機の中は、非日常の空間であると同時に、安全が何よりも優先される場所です。そこにいる人が安心して過ごせるように、常に冷静に判断し、お客様に笑顔を向けられるキャビンアテンダントになりたいと考えています。

キャビンアテンダントになるために必要なことを調べたところ、身に付けるべき重要な力がいくつかあると分かりました。

一つ目はコミュニケーション力です。コミュニケーションとは、ただ言葉を交わすことだけ

ではありません。以前、校長先生が「目と耳と心すべてで相手の話を聞くことが大切だ」とおっしゃっていたのが印象に残っています。私は、友達との会話で相手の目を見ていなかったり、話を聞き流してしまったりすることがあります。そのことに気づいてからは、必ず目を見て話し、心を込めて聞くように意識するようになりました。

二つ目は語学力です。キャビンアテンダントは外国のお客さまとも多く関わります。言葉が通じなければ相手が困っているときに助けられません。英語は必ず身につけなければならない力だと考えています。

三つ目は細やかな気配りです。乗客一人ひとりの表情や仕草から状況を察し、先回りしてサポートをすることが求められます。

その他にも、長時間のフライトをこなし、緊急時に冷静に対応するには、体力や精神力、そして安全を守る判断力も欠かせません。

私はこれらの力を身につけるために、日常の中でできる努力を積み重ねていきます。

まずは英語の勉強です。私は高校を卒業するまでに英検2級を取得することを目標にしています。いきなり2級は難しいので、3級から挑戦し、段階を踏んで実力を伸ばしたいと思っています。授業に真剣に取り組むことはもちろん、ALTの先生に会ったときにはできるだけ日本語を使わず、英語だけで話すように心がけます。最初はうまく伝わらず理解してもらえないこともあると思いますが、努力を重ねて「伝わる英語」を使えるようになりたいです。

次に、コミュニケーション力を高めることです。自分の話を分かりやすく伝えられるように話し方を工夫し、人の話を聞くときはしっかり目を見て耳を傾けることを意識しています。初対面の人に明るく声をかけられるのは私の強みです。実際に、他校の生徒との交流や入学式での場面でも、笑顔で話しかけることができ、周囲から、

「人見知りせず会話ができてすごいね。」

と言われました。この強みを生かし、さらに人に安心感を与えられる対応を目指します。

また、夏休みの課題で行った職業インタビューでは、姉の知り合いの元キャビンアテンダントの方にお話を伺いました。印象に残ったのは「やりがいを感じる瞬間」についてです。その方は、お客さまの笑顔を見られたときと無事に飛行機が着陸したときにやりがいを感じるとおっしゃっていました。特に「お客さまの笑顔」という言葉は、私の心に強く残りました。私自身も、誰かが喜んでくれたり「ありがとう」と言ってもらえたりすると、とても嬉しくなります。だからこそ、キャビンアテンダントとして人を笑顔にできる存在になりたいと思いました。

一方で、「仕事の大変さ」も印象に残りました。キャビンアテンダントは華やかなイメージを持たれることが多いですが、実際は長時間フライトや時差との戦いがあり、体力的にも精神的にも負担が大きいそうです。特に十時間を超えるフライトでは、十分な睡眠を取れないまま緊急時への備えを続けなければなりません。その厳しさを聞いて、私はこの仕事が決して楽ではないことを知りました。しかし同時に、その厳しさを超えてお客さまの安全を守り、笑顔を生み出す仕事だからこそ、大きなやりがいがあると分かりました。

私は責任感を持って物事に取り組むことも大切にしています。私は今年、HR長に立候補しました。立候補者がいない中で「おもしろそう」と思い手を挙げましたが、引き受けたからには責任を持ってやり遂げる覚悟を決めました。特に文化祭の準備の中では、自由に行動してしまう人もいて、厳しいことを言わなければならない場面もありました。しかし、嫌われることを恐れずにクラス全体のために行動した結果、クラス発表も装飾も無事に完成させることができました。この経験から、責任を果たすことの大切さを学び、将来の夢にもつなげたいと思っています。

私は、キャビンアテンダントという仕事に憧れを持つだけでなく、その厳しさも理解した上で挑戦したいと思っています。そして、英語力やコミュニケーション力を磨き、体力や責任感を高めながら、世界中のお客さまに安心と笑顔を届けられる人になりたいです。夢を叶えるまでには多くの努力が必要ですが、一つひとつの挑戦を積み重ね、必ず目標を実現したいと考えています。



地域の医療と私の夢

下田高等学校1年 高橋 莉乃

私の夢は、看護師になることです。小さいころ、病院で看護師さんにやさしく声をかけてもらい、安心できた経験があります。その姿に憧れ、私は「人を救える存在になりたい」と考えるようになりました。この思いは高校に入学した今でも変わっていません。高校生活を送る中で、夢とあわせて地域の課題について考える機会も増えました。授業で地域の現状を学び、日常生活で不便さを感じる中で、私は「医療」という分野に強く関心を持つようになりました。そこで改めて考えたのが、私の住む東伊豆町における医療の課題です。

一つ目は「高齢化」です。全国的に高齢化が進む中、東伊豆町でもその傾向は顕著で、通院

に不便を感じている高齢者が少なくありません。車を運転できない方にとって、病院までの距離や交通手段の不足は大きな負担です。診療を受けたいと思っても簡単に通えず、症状が悪化してから受診せざるを得ない状況もあるのではないのでしょうか。医療を必要とする人に届きにくい現実があることを、私は強く感じました。

二つ目は「救急医療の対応の難しさ」です。東伊豆町は坂が多く、道も狭いため、救急車が現場にスムーズに入れないケースがあるのではないかと考えました。もし自分や家族、知り合いが急病になったとき、救急車がなかなか到着できなかったら。そう思うと大きな不安を覚えます。高齢化が進めば救急車を必要とする場面はさらに増えるはずで、この課題を考えると、迅速に対応できる道路や交通の整備が進むことが、命を守る上で不可欠だと感じます。

もちろん、交通整備は私一人の力で解決することではありません。しかし看護師として地域の人々の声を拾い上げたり、現状を伝えたりすることはできます。そうした小さな働きかけが積み重なれば、未来の課題解決につながるはずです。

では、私が目指す「理想の看護師」とはどのような存在でしょうか。それは、患者さんの身体だけでなく、心も支えることのできる看護師です。人は病気になると、身体的な辛さだけでなく、不安や孤独感も抱えます。特に一人暮らしの高齢者にとって、病気やけがは精神的に大きな負担です。そんなとき、ただ治療を行うだけでなく、寄り添い安心を与えられる存在が必要だと思います。私自身、これまでの学校生活で友人や先生に支えられてきました。悩んでいたとき、声をかけてもらうだけで安心できた経験があります。その安心感を、今度は私が看護師として患者さんに届けたいのです。だからこそ、私は心身ともに支える看護師を目指しています。

地域で暮らす人々が「この町なら安心して生きていける」と思えることは、とても大切なこ

とです。そのために医療は欠かせません。私は看護師という立場から地域を支え、課題解決に少しでも貢献したいと考えています。

これからも学びを重ね、資格を取るだけでなく、人の気持ちに寄り添える看護師を目指します。高校生活の中でも、勉強はもちろん、人との関わりを通して多くを吸収し、未来の自分を形づくる土台にしていきたいです。そして将来は、高齢化が進んでも「ここに住んでいてよかった」と思える町で、人々を支えられる看護師になりたいと思います。私の夢が、よりよい地域づくりの力になるよう、努力を続けていきます。



心安らぐふるさと

伊豆伊東高等学校 2 年 土屋 日南

「東伊豆町の好きなところは？」と聞かれたら、多くの人はどう答えるでしょうか。温泉でしょうか。美味しい海の幸でしょうか。それともこの豊かな自然でしょうか。きっとその答えは人によって様々だと思います。私が一番に思い浮かべるのは、伊豆急線から見える景色です。私は通学のために伊豆急線を使っています。車窓に映る青く壮大な海と空、車内に吹き込んでくる爽やかな潮風。高校に入学した当時は、海に照りつける眩しいほどの朝日に毎朝見とれていました。それから一年と少しが経ち、そんな景色見慣れてきた今でも、車窓からの景色に目を輝かせている観光客の姿を目にすると、何故

か私まで誇らしいような、得意気な気持ちになります。

最近では海外からの観光客を見かけることも多くなり、電車は多くの旅行鞆を持った人で賑わっています。英語や中国語など、聞き慣れない言語が飛び交う車内で、コロナ禍のガラガラだった東伊豆町を思い出し、今の賑わいに驚きます。多くの観光客がこの町に興味を持ち、実際に足を運んでくれる、というのは私たち町民にとってとても嬉しいことです。しかしそんな一方で、この町の状況の変化にどこか寂しさを感じてしまうこともあります。観光客が増えたことで、電車や駅は賑やかになりました。それは決して悪いことではありません。しかし、混雑する電車の中で通路を塞ぐスーツケースや、席が空かず立っている年配の方々の姿を見かける度に、東伊豆町の持つあたたかさが失われてしまっているようで、どこかやるせなく思うのです。

けれど、そんな気持ちになるからこそ私は改めて、東伊豆町を訪れる人々に感じてほしいことは何か、「この町が持つ魅力」について考えるようになりました。美しい景色を望むことができる観光スポットや、新鮮な地元の食材を使った美味しい食事はもちろんこの町の魅力です。しかし、それだけが東伊豆町の良さではありません。気軽に挨拶をしてくださる地域の方々や、海外からの観光客に対応しようと一生懸命に働く駅員さんの姿。季節とともに移ろう山々の風景や旬の食材。こうした日常の中にある小さな出来事や景色こそが、この町のあたたかさを形作っているのだと思います。

私は幼稚園、小学校、中学校の約十二年間この町内の学校へ通い、毎日をこの町で過ごしてきました。町外の高校へ進学した今、この町で過ごす時間も減り、今まで当たり前聞いていた時報のチャイムを耳にすることも少なくなりました。東伊豆町から少しだけ離れたそんな今だからこそ、この町のあたたかさがより身に染みて感じられるような気がします。今まで特に

気にとめたこともなかった何気ない日常の景色が、今ではとても尊いものを感じられるのです。

私は去年の夏、高校の宿泊学習で稲取に一泊しました。フィールドワークで細野高原に登ったことは、今でも忘れられない思い出です。山道を登ってきた疲れを忘れてしまうくらい、頂上からの景色は素晴らしいものでした。どこまでも広がっていくような海と空と、遠く小さく見える稲取の町並み。私はこんな素敵な景色の中で暮らしていたのか、と感動したことを覚えています。

私がこの経験を通して一番に思ったのは、ただ住んでいるというだけでは気づくことができない魅力がたくさんあるのだということです。そして、その魅力がたくさんあるのだということです。そして、その魅力に気づいたとき、私たちは自分たちのふるさとである東伊豆町のことを、もっと好きになれるのだと思います。

私は、この東伊豆町が観光客からも地元の人からも愛され、大切にされる町であってほしいです。地域の思いやりのあたたかさや、人々の心を動かすことができる素晴らしい景色。私たちの背中をそっと押してくれるような、そんな東伊豆町の魅力を観光に来る人にも感じてほしいのです。そのためにはまず、私たち地元の人間ひとりひとりがこの町に目を向け、地域がもつあたたかさや魅力を再認識することが必要なのではないのでしょうか。

地域の行事に参加すること、人と挨拶を交わすこと、自然や景観を大切にすることなど、どんな小さなことからでも。この町を思って行動することが、東伊豆町の魅力を作り、そして守っていくための第一歩となると思います。そしてその魅力はきっと、観光客をはじめとする町外の人々にも伝わり、この町を訪れた人の心に残るでしょう。

町外の人にとっては「また訪れたい場所」となり、町内の人にとっては「この町で暮らせて幸せだと思える場所」を作る。そのためには、

まず私たちがこの町に誇りを持ち、日々の中で小さな心がけを続けていくことが必要不可欠です。私もこの町で育った一人として、人と人との交流やこの豊かな自然を大切にできる人間でありたいと思います。

この東伊豆町が、訪れる人にとっても暮らす人にとっても、「心安らぐふるさと」でありますように。



回数		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
学校名		昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度
小学生	大川小学校5年	稲葉 賢史	後藤 麻衣子	鎮田 泰代	稲葉 恭子	内藤 晴之
	大川小学校6年	飯田 瑞穂子	稲葉 美穂子	稲葉 隆行	稲葉 早千江	飯田 めぐみ
	熱川小学校5年	小林 千枝	鈴木 理史	川上 竜司	木村 昌弘	藤井 愛
	熱川小学校6年	井原 みゆき	森田 綾	島田 浩充	濱野 剛稔	横山 あかね
	稲取小学校5年	村木 町子	山田 亜矢子	奈良 有希子	石井 夏菜	雲野 多恵
	稲取小学校6年	加藤 郁美	鈴木 美恵子	渡辺 宏	村木 美輝	内藤 美奈子
中学生	熱川中学校1年	嶋田 千穂	飯田 瑞穂子	加藤 久美子	加藤 友美	小林 浩一
	熱川中学校2年	土屋 いづみ	兼子 まや	飯田 瑞穂子	稲葉 るみ子	加藤 友美
	熱川中学校3年	前田 慶子	及川 智恵	稲葉 真紀	児島 涼子	稲葉 美穂子
	稲取中学校1年	鈴木 有美子	福岡 慈子	金指 直子	田原 竜也	太田 雅也
	稲取中学校2年	山田 幸二	滝 裕子	福岡 慈子	渡辺 奈穂子	田山 麻理絵
	稲取中学校3年	堀川 泰代	滝 悦子	平田 洋子	石原 尚子	古屋 桃子
高校生	稲取高等学校	松山 美加	田原 俊介	和田 めぐみ	鈴木 活生	庄司 好男 遠藤 智美
	下田南高等学校					鳥沢 たまき
	伊 東 城ヶ崎 高 等 学 校				大内 佳人	雄谷 隆夫 三浦 周一郎
	下田北高等学校			鈴木 参日	辻 由美子	加藤 正剛
	下 田 南 (定 時 制)					
	伊 東 商 業 高 等 学 校					
	伊 東 高 等 学 校					

回数		第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
学校名		平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度
小学生	大川小学校5年	木村 直樹	稲葉 世里子	稲葉 健太	飯田 多賀乃	横山 美和
	大川小学校6年	飯田 剛弘	木村 和加子	山下 優子	飯田 洋一	片山 房子
	熱川小学校5年	山本 稚奈	木村 奈津子	小林 真瑛	田神 敬祐	坂田 菜穂子
	熱川小学校6年	木村 明人	戸田 景子	木村 浩子	高羽 さやか	太田 恵子
	稲取小学校5年	伊東 久恵	鈴木 智和	山田 美保子	鈴木 精一郎	内山 亜紀子
	稲取小学校6年	垂井 幸	桑原 加奈子	横山 真理	太田 博之	小池 正治
中学生	熱川中学校1年	不二山 千晴	溝尾 祐	不二山 仁美	野澤 留実	鈴木 美菜
	熱川中学校2年	土屋 はるか	金指 亮太	豊島 真美	鈴木 佑理	野澤 留実
	熱川中学校3年	秋永 美絵	鎮田 泰代	飯田 留美	島田 深志	山本 稚奈
	稲取中学校1年	内藤 夕子	小知和 寛子	篠田 知子	鈴木 未奈	古屋 彩花
	稲取中学校2年	鈴木 照子	斎藤 立枝	小知和 寛子	花田 知子	遠藤 裕美
	稲取中学校3年	田原 竜也	宮原 崇敏	金指 貴子	山田 恵梨子	坂部 千秋
高校生	稲取高等学校	勝間田 秀寿 前田 朝子	鈴木 一繁	飯田 仁美	高村 幸邦	飯田 剛弘
	下田南高等学校	石原 尚子				
	伊東城ヶ崎 高等学校				土屋 富浩	前野 智恵子
	下田北高等学校				飯田 ひとみ	小知和 寛子 飯田 めぐみ
	下田南(定時制)					
	伊東商業 高等学校					
	伊東高等学校					

回数		第11回	第12回	第13回	第14回	第15回
学校名		平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度
小学生	大川小学校5年	湯川 貴喜	稲葉 由莉	西尾 雅輝	木村 高德	
	大川小学校6年	岡田 真美	稲葉 愛美	稲葉 由莉	星野 健作	山本 茜
	熱川小学校5年	中島 亜希子	石森 千春	坂田 佳之	秋永 知南	
	熱川小学校6年	横山 隆志	湊 渉子	相沢 祐樹	山岸 みづ紀	山本 紗弓
	稲取小学校5年	小野 仁実	米澤 亜弥	佐藤 翠	富岡 加織	
	稲取小学校6年	村山 恵美	富岡 志穂美	栗田 里美	内山 浩美	鈴木 友里子
中学生	熱川中学校1年	飯田 多賀乃	土屋 美和	山本 力道	久野 麻紀	
	熱川中学校2年	稲葉 健太	飯田 多賀乃	横山 宏美	曾我 真奈美	森田 みなみ
	熱川中学校3年	嶋田 早紀子	鈴木 美菜	乗松 宏衣	河内 孝樹	佐藤 香里
	稲取中学校1年	遠藤 有希子	石垣 ちさと	佐藤 栄美	金指 令枝	内山 浩美
	稲取中学校2年	稲葉 いづみ	山口 宏美	上嶋 麻衣子	村木 貴	
	稲取中学校3年	桑原 敦子	秋田 真澄	清水 高明	古屋 明日花	村木 貴
高校生	稲取高等学校	村木 さやか	須藤 裕美	鈴木 梓	土屋 晋	村上 ゆりこ
	下田南高等学校	金指 純子	内山 加奈子	前田 美佐子	鈴木 千絵	
	伊 東 城ヶ崎 高 等 学 校			田中 有希子	五十嵐 広行 高橋 真未	鈴木 愛理
	下田北高等学校	濱野 友加 内山 太恵子	脇田 春啓	野澤 幸恵	湊 浩子	平川 城太郎
	下田南(定時制)	市川 容子	太田 梓			
	伊 東 商 業 高 等 学 校	土屋 健一	高橋 映年	横山 麻子	稲葉 留美	
	伊 東 高 等 学 校				横山 綾子	米沢 知紘

回数		第16回	第17回	第18回	第19回	第20回
学校名		平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年	歌田 裕美	稲葉 啓太郎	木村 美穂	木村 佳奈美	稲葉 拓人
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	伊藤 梨紗	中村 賢哉	京極 雄大	岩間 康平	中村 駿介
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	芹澤 美沙	遠藤 悠子	内山 颯子	鈴木 里咲	山田 瑞季
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年	梅原 千種	石川 泰希	稲葉 寛美	山本 彩香	高崎 頼
	熱川中学校3年	石森 千春	前田 友美	山本 茜	飯田 龍仁	鈴木 雅晃
	稲取中学校1年					
	稲取中学校2年	中山 美穂	本田 璃菜	八木 厚子	上嶋 紗也加	齊藤 佳穂
	稲取中学校3年	黒田 祐介	内山 浩美	鈴木 宏規	石井 三香子	本田 華菜
高校生	稲取高等学校	野口 花菜	小野澤 宏太	菊地 恵	鈴木 俊太	土屋 奈菜
	下田南高等学校		山田 佐世		平井 里奈	村上 麻実
	伊東城ヶ崎高等学校	佐々木 草平	遠藤 あゆみ	太田 裕介	石塚 里沙	星野 千秋
	下田北高等学校	富岡 志穂美	村木 かおり	鈴木 成禎	飯田 宗一郎	千葉 崇幸
	下田南(定時制)					
	伊東商業高等学校		森田 有希子	富田 さち	前田 尚也	新居 功
	伊東高等学校	太田 美佐	金作 美紀	遠藤 央恵	佐藤 舞	秋永 亮

回数		第21回	第22回	第23回	第24回	第25回
学校名		平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年	木村 慎太郎	稲葉 大樹	石井 圭介	飯田 夕稀	後藤 隼希
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	鈴木 亜実	大兼 ことみ	八木 梨紗	渡邊 里奈	中村 萌
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	石井 輝	鈴木 結稀	米澤 茜	村木 恭二	盆子原 茜音
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年	加藤 郁美	黒田 訓英	有賀 伊久磨	大兼 ことみ	八木 梨紗
	熱川中学校3年	市川 加菜	富樫 貴史	石井 光晴	小澤 翔太	木村 沙枝美
	稲取中学校1年				米澤 茜	大塩 朝加
	稲取中学校2年	塙 麻祐子	鳥沢 香純	宮崎 恵里奈		
	稲取中学校3年	森下 泰羽	山田 茉莉花	安森 沙耶	安部 尊誼	田村 彩
高校生	稲取高等学校	梅原 麻美	岩崎 里音	竹内 遥香	前川 美悠	大鳥 瑞希
	下田南高等学校	高村 和	上島 麻実			
	伊東城ヶ崎高等学校	宍戸 沙耶香				
	下田北高等学校	山田 晴美	山田 剛史	横山 美紀		
	伊東高等学校城ヶ崎分校		早瀬 明日香	森 正代	篠澤 勇志	土屋あゆみ
	伊東商業高等学校	太田 侑紀		中山 瑛里	吉田 美沙	
	伊東高等学校	横倉 園枝	中村 歩美	釜田 みずき	滝口 汐利	山田 美智子
	下田高等学校				相良 龍太郎	石井 利枝

回数		第26回	第27回	第28回	第29回	第30回
学校名		平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年	石井 拓也	稲葉 陶真	飯田 咲喜	石井 那於	飯田 大喜
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	加藤 博己	土屋 花音	田村 伊織	嶋田 翔太郎	鳥澤 侑生
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	高橋 大地	藤邊 光源	佐久間 祐也	太田 翔夢	梅原 千裕
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年	萩原 歩美	石井 奈菜子	臼井 裕貴	岩崎 航大	篠原 陽
	熱川中学校3年	穴澤 なな子	飯田 夕稀	稲葉 義充	森 萌香	茂木 優紀
	稲取中学校1年	鈴木 絢子	村木 亜未香	稲葉 亜汐	鈴木 琢也	齋藤 陸
	稲取中学校2年					
	稲取中学校3年	宮崎 玲唯奈	太田 和希	山田 さくら	鈴木 綾乃	千葉 優寿花
高校生	稲取高等学校	阿部 佳澄	竜田 匠	上柳 希	中嶋 美幸	西田 翔
	伊東高等学校 城ヶ崎分校	川合 清香	穴澤 なな子	加藤 美里	佐藤 恭子	小野 あいり
	伊東商業 高等学校	奥村 美咲	木村 遥	木村 円香	加藤 百夏	石井 茉夕子
	伊東高等学校			土屋 かおる	日下 拳	
	下田高等学校	村木 由仁	横山 蓮	山本 伊万里		相澤 蘭
一般						

回数		第31回	第32回	第33回	第34回	第35回
学校名		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年	茂木 洋輔	木村 優太	柚田 唯生		
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	亀浦 ももか	工藤 真帆	土屋 慶音	稲葉 佳丈	高羽 雄大
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	強谷 菜々美	八代 隆世	黒田 ゆき	鈴木 尚	飯田 凜音
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年	常盤 大聖	長谷川 珠里	山本 晃己	木村 優太	
	熱川中学校3年	富田 夏帆	小柳 李菜	内山 結愛	藤井 菜々美	稲葉 理桜
	稲取中学校1年	内山 世那	宮下 旦	内山 桃華	鈴木 泰晴	鈴木 友菜
	稲取中学校2年					
	稲取中学校3年	山田 朝陽	村木 美憂	清水 悠加	前田 晃佑	井口 恋来
高校生	稲取高等学校	山本 瑠夏	菊池 和磨	前田 雄太郎	佐藤 南星	山本 大翔
	伊東高等学校 城ヶ崎分校	青山 今日子	小川 奈々	佐藤 彩音	太田 あゆみ	
	伊東商業 高等学校	山田 真治郎				
	伊東高等学校	稲葉 夕夏		齋藤 那希		
	下田高等学校	西田 亜美	川端 綾	米澤 凜夏	高羽 隆生	山田 龍道
一般						本多 まゆみ

回数		第36回	第37回	第38回	第39回	第40回
学校名		令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年					
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	木村 真緒	野口 はな	木田 真奈羽	笠井 舞花	松本 楓優
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	山田 薫生	鈴木 凜	鈴木 莉音	嘉瀬 琴葉	鄭 喜元
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年					
	熱川中学校3年	木村 侑和	生田目 朱莉	梅野 強	船山 明日香	金田 泰泉
	稲取中学校1年					
	稲取中学校2年					
	稲取中学校3年	石井 六花	田村 悠華	鈴木 奈都菜	藤邊 妙果	稲岡 宥映
高校生	稲取高等学校	前田 瑠花	米澤 ゆず	八代 勇渡	山崎 莉々亜	山田 薫生
	伊東高等学校 城ヶ崎分校					
	伊東商業 高等学校	宮下 耀	竹内 楓	山本 ゆりか		
	伊東高等学校			清水 朝成		
	下田高等学校	田村 豪人	横山 海斗	進藤 寧緒	田代 龍輝	鈴木 絢
一般			高瀬 真由			

回数		第41回	第42回	第43回	第44回	第45回
学校名		令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度	令和11年度
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	横山 菜々花				
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	瀬戸尾 朱里				
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年					
	熱川中学校3年	鈴木 壯太郎				
	稲取中学校1年					
	稲取中学校2年					
	稲取中学校3年	渡邊 堇				
高校生	稲取高等学校	高橋 瑠華				
	下田高等学校	高橋 莉乃				
	伊豆伊東 高等学校	土屋 日南				
一般						

編集・発行

第 41 回 東伊豆町青少年主張発表大会文集

東伊豆町 教育委員会事務局 社会教育係

TEL：0557-95-6206

FAX：0557-95-5691